

プラトンの創設した哲学の学校

『アカデメイア』の想定復元

復元：大林組プロジェクトチーム

Obayashi Gumi Project Team

監修：青柳正規

Masanori Aoyagi

画：穂積和夫

紀元前四世紀という昔、古代ギリシアのアテナイ（アテネ）の地にひとつの学校が誕生した。創設者は哲学者プラトン、アカデメイアと呼ばれたこの学校は、盛衰を繰り返しつつも以後九〇〇年もの長きにわたり西洋哲学の象徴的地位を占め、知の源泉としての役割を歴史に刻んだ。「アカデミー」の語源ともなった学校アカデメイアだが、一方でその建築的側面についてはほとんど知られていない。そこで今回、大林組プロジェクトチームは東京大学教授青柳正規氏に監修をいただき、プラトンの創設したアカデメイアの想定復元に挑戦した。

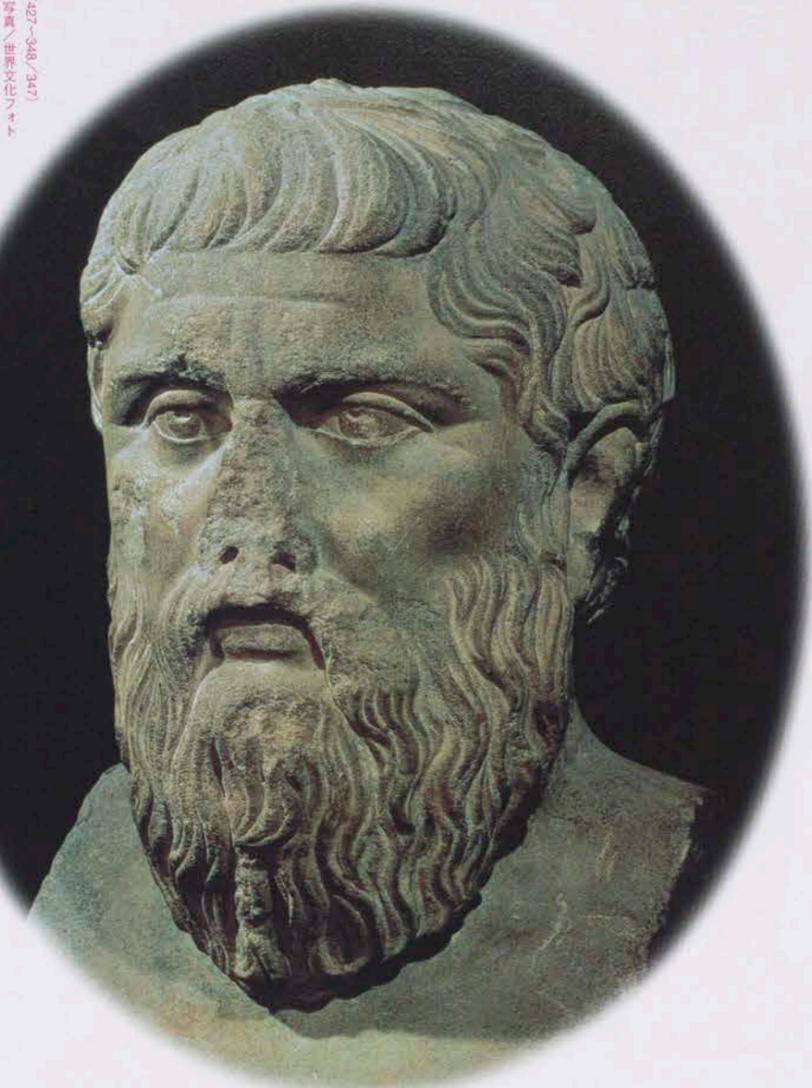


一 アカデメイアとは何か

古代ギリシア哲学の研究者として知られたジョン・バーネットは、プラトンについてこう評している。「かつてこの世に生をうけたひとびとのうちもつとも偉大な人物」……そしてその理由として、「プラトンが、われわれの文化におけるすべてのもつとも善きものもつとも重要なものの源泉である」と記している（『プラトン哲学』出隆・宮崎幸三訳岩波書店）。プラトンの名は今日でも、ソクラテス、

アリストテレスと並んで、古代ギリシア哲学の雄としてよく知られている。プラトン哲学の根幹とされるイデア論や哲人王政治について、何らかの知識をもっている者も少なくないであろう。

しかしその一方で、プラトンがみずからの思索と若者たちの教育の場として、アテナイ（アテネ）郊外に紀元前四世紀に創設した学校については、意外なほど知られていない。この学校こそアカデメイアと



プラトンの像（487/484-347）
ルビー美術館蔵 写真/世界文化フォト
古代ギリシアの大哲学者、ソクラテスの影響のもとに「哲学」を学問として大成した。イデア論を根本とする理想主義哲学は、弟子アリストテレスの経典主義、現実主義の哲学と並び、西洋哲学思想史の伝統を二分し、はかりしれぬ影響と刺激を与えている。

絶えず、国政の混乱を背景に、有能な政治家や立法家の育成は急務のことだったのである。

知の殿堂としてのアカデメイアは、創設時から有名な哲学の学校として、アテナイ以外の都市国家や外国からも多くの学生がやってきた。

アリストテレスもそのひとりで、一七歳のときにギリシア北方のマケドニアからきて、以後二〇年にかけてアテナイで学び、研究に励み、そして教えた。アリストテレスはやがて若きアレクサンドロス王子（のちの大王）の家庭教師を勤めたあと、アテナイに戻って別の場所（リュケイオン）に自分の学校を開いている。

一方、学校運営に関しても、アカデメイアは際立った特徴をもっていた。授業料に相当するものを、学生から徴収しなかったのである。それはプラトンの師ソクラテスが、いっさいの金銭を求めなかったことに由来するといわれる。プラトンはアテナイの名家の出身だが、彼の遺言書などから判断すると、学校を経営するほどの経済力はなかったと思われる。学校の運営資金は、シケリア（シシリー）のシユラクサイの実力者ディオンのような支援者や、アテ

ナイの富裕な市民層からの寄付などによって成り立っていたと考えられている。一説によれば、プラトン自身も果樹園を経営し、オリブ貿易にもかかわっていたともいわれている。

また、女性の地位が低かったギリシア世界において、プラトンは女性の知的活動や肉体の鍛錬を積極的に支援し、学校を開放した。プラトンの時代、これは画期的なことであり、学内には少なくともふたりの女学生が学んでいた。

アカデメイアに関するこうした断片的な歴史やエピソードからも、この学校が学術研究や教育機関として高名であるばかりでなく、国家経営や立法にかかわる実務的な人材の育成という社会的役割を果たしていたこと、また市民層にも支持された自由で開明的な雰囲気をもっていたことが知られる。

その背景として、アテナイの歴史風土についても少し触れておきたい。アテナイがギリシア世界の中心的な都市国家（ポリス）となりえたのは、ラウリオン山の銀とヒュメトス山の大理石という鉱物資源に加え、外港ピレウス（ピレウス）を通じての海運・交易活動による富の蓄積にあった。とりわけピ

呼ばれ、体系的なカリキュラムにしたがって高度な教育活動をおこなう初期の学校であり、西洋における大学の嚆矢ともいわれている。そこはまた、バーネットのいう「すべてのもつとも善きもの、もつとも重要なものの源泉」となった「場」でもあった。今日、さまざまな学術・芸術分野の組織に名付けられるアカデミー（学会・学園）の名称も、ここに始まる。明治以降、西洋の哲学や科学を積極的に導入した日本にとっても、アカデメイアはいわば遙かなる精神的故郷というにふさわしい場所なのである。

ではアカデメイアとは、どのような学校だったのだろうか。プラトンはその生涯に、「ソクラテスの弁明」をはじめ、「饗宴」「国家」「法律」など数多くの著作を残したが、みずからの学校については残念ながら一言も記していない。しかしギリシア・ローマ時代の歴史家や伝記作家などの残した記述から、アカデメイアの性格の一端をうかがい知ることができる。そのひとつは、プラトンの学校が当初から高度な人間教育を目的としていたことである。プラトンのいう哲学とは、狭義の哲学のほかに、数学・幾何学・自然学（天文・生物）・音楽など、真理を究める広範囲の学問を包括していた。そのため教師陣にはプラトン自身のほか、立体幾何学の創始者タイテトスや、理論天文学の第一人者エウドクソスといった当代一流の人物が協力していたともいわれている。

プラトンの理想とした哲人王政治は、こうした総合知としての哲学を究めた者による国家運営を指している。実際にアカデメイアからは、周辺の都市国家の求めに応じて政治や立法、軍事にかかわる人材が多数派遣されている。当時のギリシア世界は、アテナイとスパルタに代表される都市国家間の戦争が

レウス港の役割は大きく、アテナイは市の中心から八キロ離れた港までの道路を確保するために城壁を築いてさえている。この港を軸に強大な海軍力を養成することにより、アテナイはペルシアの侵攻をも防ぎ繁栄を誇ったのである。

プラトンの時代のギリシアでは、アテナイを中心としたデロス同盟と、スパルタを軸としたペロポネソス同盟軍との二七年間にもわたる戦争が続いていた。アテナイはこの戦争に敗北したが、その後もギリシアでは都市国家間の紛争が続発していた。プラトンはこうした混乱の時代に生まれ育ち、そして学校を創設したことを忘れるわけにはいかないだろう。

アテナイはすでにかつての栄光を失いつつあったが、それでも富裕な商人層を中心とした経済力と、市民層の活発な知への好奇心、そして数多の矛盾を抱えながらも民主政治を継続する自由な精神風土はなお健在であった。

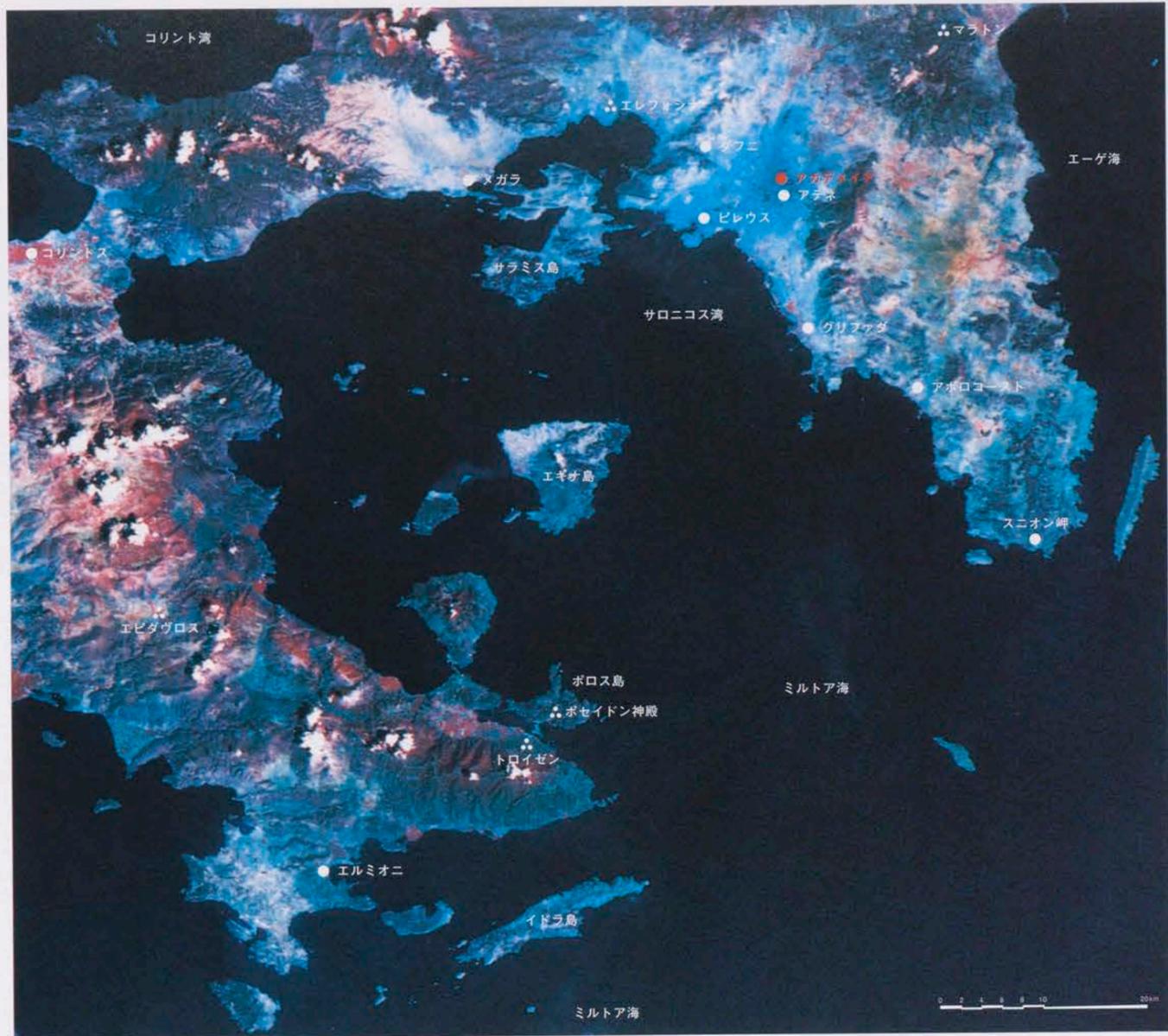
それらが相まって、プラトンのような思索家を育て、アカデメイアの校風の土壌ともなっていたと想像される。

の土地であった。プラトンがなぜアカデメイアの地に学校を開いたのかは明確ではないが、その理由のひとつとしてギムナシオンの存在を挙げることができる。プラトンの青年時代、民主政体の敷かれたアテナイでは選挙や法廷論争に必要とされる弁論術が重視され、その伝授をするソフィスト（職業的教師）たちが盛んに活動していた。ギムナシオンには若者たちが集まることから、ソフィストの中心的な活動の場となっていた。

アカデメイアとは、元来はアテナイのディピュロン門から北西へ約一・五キロメートルにある、英雄アカデモスにちなんで名づけられた土地の名称であった。この地が歴史に登場するのは紀元前六世紀後半のことで、アテナイの僧主ペイシストラトスの子ヒッパルコスがギムナシオン（公共体育場）を建設したことが伝えられている。

当初のアカデメイアは荒涼とした地であったが、前四六八年にアテナイ海軍の海将キモンがペルシア海軍を打ち破ったおり、その戦利品を元手に大規模

な灌漑・緑化事業がおこなわれた。その結果、ソクラテスやプラトンの時代には、オリブやポプラ、スズカケ、ニレなどの豊かに繁る森のなかを散策路がめぐり、その美しさはソポクレスやアリストパネスらの詩歌や劇にも歌われるほどであった。森にはプロメテウス、ムウサ（ミューズ）、ヘルメス、アテナ、ヘラクレスといった神々の像が祀られ、アテナの重要な行事である聖燭（松明）競争がおこなわれる神苑となっていたのである。その広さは、およそ四五〇メートル×三〇〇メートル程度の、方形

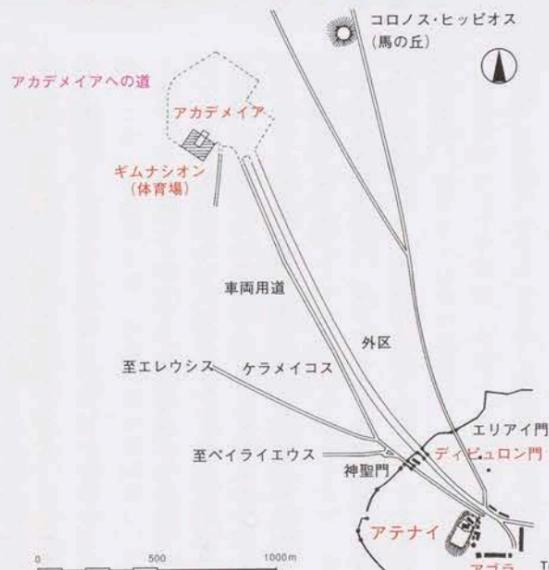


現代ギリシア主要部 写真/PPS



アクロポリス 写真/世界文化フォト

TravLos, J., Pictorial Dictionary of Ancient Athens, London, 1971による



プラトンが師と仰いだソクラテスもまた、ギムナシオンをしばしば訪れ、そこでソフィストたちの詭弁を暴き、真理を追及するための哲学的対話を若者たちと交わした。

当時のアテナイにはアカデメイア、リュケイオン、キュノザルゲスという三つのギムナシオンがあったが、こうした場所こそプラトンにとっても親しみのある、哲学の場だったのである。

プラトンの学校創設の契機については、ディオゲネスの『プラトン伝』やブルツタルコス『英雄伝』が、興味深いエピソードを伝えている。プラトンは若い頃に政治家を志したが、ギリシア随一の賢人といわれたソクラテスが神への不敬を理由に刑死した時期（前三九九年）を境に、現実の政治への参加からは距離をおくようになった。ソクラテスを死に追いやった、アテナイの政治状況に失望したともいわれている。

前三八七年、四〇歳になったプラトンはイタリヤ・シケリアへの旅行をおこなう。そのおりシュラクサイの僧主ディオニュシオス二世と会見したもので

の、激しく意見が対立した。当時プラトンはすでに哲人王政治の考え方をもちており、それが独裁者である僧主の怒りをおこしたともいわれる。

プラトンは僧主によって奴隷として売られる破目に陥ったが、それを知ったキュレネ人のアンニケリスが買い取り、アテナイの友人たちのもとへと送り届けた。友人たちはさっそく返礼の銀貨を送ったが、アンニケリスは受け取らず、かわりにプラトンのためにアカデメイアの地に小園を購入した。まもなくプラトンはその小園に私邸を建て、暮らし始めたのである。

このエピソードは、プラトンによる学校創設の時期を旅行直後の前三八七年頃とする、現在の定説の根拠ともなっている。と同時に当時の哲学というものが、いかに政治や国家と密接に結びついた真摯な実学であったかを、現代の私たちにも教えてくれる。プラトンが学校設立の意図をいつ抱いたのかは不明だが、この旅行時の体験を通じて、国家づくりの基盤となるべき哲学教育の必要性を確信したのではないだろうか。

三 「アカデメイア」の想定復元

①建物の構成

プラトンの創設した学校アカデメイアには、どのような建物があったのだろうか。すでに述べたように、後世の人々の記述からギムナシオンとプラトンの私邸があったことは判明している。しかし、おそらくは教師と学生で数十人は在籍していたであろう学校が、それだけで運営されていたとは考えにくい。体系的なカリキュラムに基づき、さまざまな学科学科を日常的に教え、学ぶには、やはり相応の規模をもつ施設が必要となる。

そこで私たちは、アカデメイアにふさわしい学校施設として、当時のギリシア建築にみられるストア（列柱廊）とエペーベイオン（講堂）を想定した。

ストアは、ギリシア建築においては神殿に次ぐ重要な公共建築物である。多目的施設だが、のちにストア学派と呼ばれる哲学の一派が出たことから分かるように、人々が集まり議論に花を咲かせた。詩の朗読や演説のほか、商取引などもおこなわれたことから、現代のストア（商店）の語源ともなっている。

もうひとつのエペーベイオンは、現代の大学など

こうして創設されたプラトンの学校が、はたしてどのような環境にあったのか、とりわけその建築的側面について私たちプロジェクトチームは興味を抱いた。そして西洋型知性の源泉ともいえるアカデメイアの姿を、誌上に再現してみたいと考えた。プラトンが教え、若きアリストテレスが学んだ学校の、生き生きとした日常の姿に、建築面からアプローチする試みである。

しかし、実際に復元のための資料調査にあたってみると、アカデメイアに関する建築資料はきわめて乏しいことが判明した。九〇〇年も続いた学校とはいえ、その創設期は日本でいえば縄文時代末期から弥生時代に相当する太古である。しかもアカデメイアは、パルテノン神殿などの観光名所とは異なり、残存する建物はなく、近年になって発掘調査がおこなわれたに過ぎない。そこで私たちは、東京大学の青柳正規教授にご協力いただき、紀元前四世紀におけるギリシア建築のプランを基礎とし、かつプラトンの学校にふさわしい建築環境を推察しつつ、アカデメイアの想定復元に挑戦することにした。

にもみられる階段教室に通じる形式の講堂である。

当時の講義の方式は教師によって異なっており、プラトンはいわゆる講義方式はとらず、学生に質問を投げかけ、その答にまた質問をおこなうソクラテス風の問答形式でおこなった。またアリストテレスはあらかじめ自分の授業内容を記したテキストを学生たちに配布したうえで、講義をおこなったといわれている。ときにはマンツーマンの対話による講義もあったであろうが、いずれにせよ多くの学生を対象として日常的に講義をおこなうには、小規模ながらも専用施設があったものと推定した。

②アカデメイアの建築

●ストア（列柱廊）

Stoa

ストアは紀元前五世紀頃には、ギリシアの都市国家の中心アゴラ（広場）における重要な建築物のひとつとなっていた。さわめてシンプルな長方形の平面形状をもち、片側は壁もしくは壁に囲まれた小部屋が並び、反対側は列柱という開放的な柱廊である。夏の強い陽射しや風雨をさえぎり快適な空間を生み出す、ギリシアの気候に適した建物でもある。

後世になると巨大化し、アテナイのアッタロスのストア（前一三五年頃）のような長さ約一二メートルで二階建てのもの、さらには小アジアのペルガモンでは長さ約二四六メートルの両面列柱のストアもみられるようになる。

アカデメイアにストアが存在したかどうかは、現時点では明確ではない。しかし、ストアは当時すでにギリシアでは人々が集まる重要な施設であり、講義や対話などのさいにも快適な空間を提供してくれる。そこに設置された小部屋は、教師たちの研究室や学生たちの勉強室としても適している。これらのことを総合的に考慮し、アカデメイアの地にはストアが存在したものと想定した。

アカデメイアのストアは、郊外という立地を考えると大規模なものではなかったと推測される。そこで今回の復元では長さ約二〇メートル、奥行約八・五メートル規模で、列柱は一本、反対側には五つの小部屋をもつ構成とした。ただし、ギリシア建築におけるストアの重要性から判断し、小規模とはいえ細部の様式などには公共建築物としての格式の高さを踏まえて復元した。

ギリシア建築の様式において、もっとも特徴的な部分のひとつが円柱である。歴史的にみると、ドーリス式、イオニア式、コリント式と変遷するが、ア

カデメイアのストアの列柱についてはドーリス式を採用した。ドーリス式は装飾こそ少ないが力強い様式で、基礎の上に礎盤を置かず円柱を積み上げ、柱頭（キャピタル）部分はエキヌスという椀状の石の上にアバクスという方形の石板を載せて梁を支えている。円柱には幅の広い縦溝が掘られ、初期には強いエンタシス（ふくらみ）がみられるが、プラトンの時代にはかなりすっきりとした形になっていたと思われる。柱・壁ともに、石造（大理石造）とし、梁や小屋組みについては木造とした。

屋根は切妻形式とし、屋根瓦は平瓦と丸瓦を組み合わせたものとした。ギリシアでは一般的な形式で、瓦は素焼きの赤褐色を呈している。瓦の形式にも、装飾の施されたラコニア式、シンプルなシテリア式、丸瓦ではなく三角形の瓦を組み合わせたコリント式などがある。今回は建築的なバランスから判断して、比較的シンプルなシテリア式、コリント式のうちからシテリア式を採用した。屋根の端部には、ライオンの頭の形をした装飾をもつ軒樋がすえられている。屋根を流れた雨水は、このライオンの口から排水される仕掛けになっている。

ストアの基礎部分は、ステュロバチスと呼ばれる三段ほどの基礎となっていてのが常である。今回も、それを踏襲した。一方、ギリシア建築の華ともいえる彫刻装飾だが、建物の発掘調査が進んでいない現段階では判断が困難である。神殿建築の場合には、妻側の三角破風にも荘厳な彫刻が施されているのが一般的だが、ストアではそうした装飾は考えにくい。とくに郊外の小規模なストアであることも考慮し、メトープ（本来の梁の上の装飾的な梁）への標準的な装飾にとどめた。

森のなかのこのシンプルなストアに集い、陽射しをさけたひんやりとした空間でプラトンが学生たちを相手に静かに語るとき、大理石の壁や床は深遠な響きを伝えたことだろう。

●ギムナシオン（体育場）
Gymnasium

前述したように紀元前六世紀後半から、この地にはギムナシオンがあったと推察されている。肉体的鍛錬や各種の競技を楽しむために多くの若者が集う場所であり、プラトンの学校はこのギムナシオンを利用する形で始まったということもできる。

一般にギムナシオンは、槍投げや円盤投げなどの屋外競技のための空間（運動場）と、レスリングやボクシングなどの室内競技用の空間（部屋）、そして浴室や塗油室といった付属施設からなる総合体育場を意味している。古代ギリシアではこのほかに、室内競技を中心とした体育施設をパライストラと呼んでいる。

アカデメイアのギムナシオンが、どの程度の規模と設備を有していたかは不明である。アテナイの三大ギムナシオンのひとつであった以上、相応の規模

は備えていたであろう。ギムナシオンでは浴室などで大量の水を使用する関係から、河川の近くに建設されることも多く、オリンピックのギムナシオンのように氾濫などで消失する例もあった。

今回の復元作業では、紀元前三世紀頃のものと思われるギムナシオン（図1）の平面図を参照とした。建物の構成は、中央に四四・四メートル×四四・四メートル規模の正方形の空地（屋外運動場）をもち、その周囲を柱廊が取り囲み、その外側に屋内施設としての部屋を配置した。各部屋の用途は、レスリング室、塗油室、浴室、蒸気浴室（サウナ）などである。

アカデメイアのギムナシオンは、オリンピック祭（オリンピックの原型）がおこなわれるオリンピアの施設などとは異なり、アテナイの郊外にあって若者たちの日常的な鍛錬の場所となっていたものである。それだけにスケールの大きさに比して、いくらか簡素な姿を想定し、壁は単純な石積みとし、明り取りの開口部を部分的に設置する程度とした。

屋根部については、ほかの建物と同様に木造の小屋根に瓦葺きとした。規模の大きな建物だけに、屋根形状もさまざまに考えられるが、平面形状と比較しつつ、建築的にもっともシンプルで合理的と思われる形を採用した。

ギムナシオンの屋内施設のなかに、エクセドラと呼ばれる部屋がいくつかある。この部屋は本来、若者たちが競技や練習のあいまに休憩・談論する場所とされている。

かつてソクラテスやプラトンといった哲学者たちはギムナシオンを訪れると、エクセドラで若者たちと対話をおこなった。それだけにプラトンの学校がギムナシオンを基軸にスタートしたとき、エクセドラはその重要な空間となったであろう。アカデメイアの第四代学頭ポレモンの時代、ムウサの社殿（ムウセイオン）とエクセドラの近くに、学生たちが小屋を作って住んでいたといわれている。エクセドラが、重要な学問の場であったことを示している。



アカデメイア跡からアクロポリスを望む

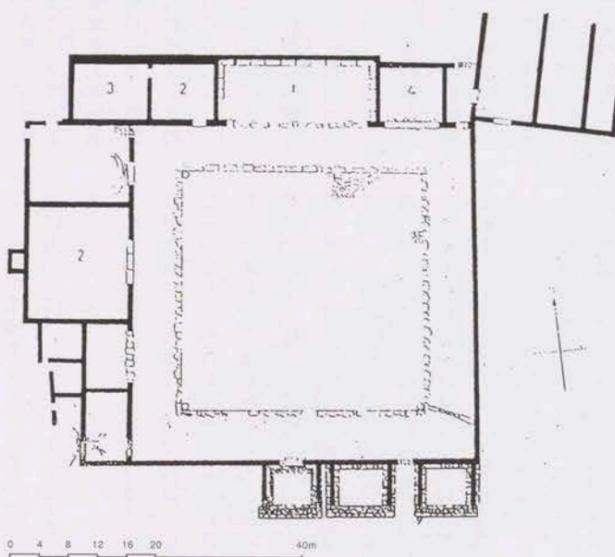
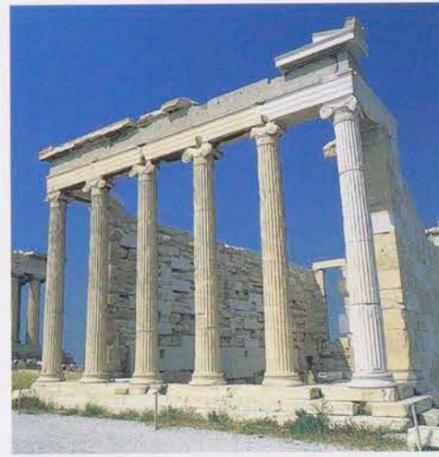


図1 ギムナシオンの平面図（参考資料）



パルテノン神殿のドーリス式の円柱 写真/世界文化フォト



アクロポリス・エレクテイオンのイオニア式の円柱 写真/世界文化フォト

●プラトンの私邸
Plato's House

プラトンの学校がギムナシオンやストアといった公共施設を利用してスタートしたなかで、歴史的に判明している唯一の固有施設といえる建物が私邸である。プラトンがアカデメイアの神苑近くに私邸を建てた時期を、学校の創設期とみるのもそのためである。

私邸とはいっても、学校そのものがプラトンの名とともにあった以上、私的生活空間とだけ考えるわけにはいかない。昼はギムナシオンやストアで講義がおこなわれたとしても、夜間には私邸に教師や学生たちが集い、談論したことであろう。

また、私邸そのものが研究施設として機能していた可能性もある。プラトン亡き後、アカデメイアの学頭（実質的指導者）のなかには、アテナイ市中に居を構える者もいたが、プラトンの形見ともいえるベキ私邸にこもり、研究にいそしんだ者も少なくない。その意味では、プラトンの私邸こそが学校の精神的



図2 オリントスの住宅群(参考資料)

支柱であったともいえることができる。

しかし、その一方で建築面からみると、プラトンの私邸がどのようなものであったかを知るための資料は皆無に等しい。建てられていた場所すら、特定できないのである。そこで今回は、古代ギリシアの一般的な住宅を参考としつつ復元をおこなった。神殿をはじめとした公共建築物が大理石造であったのとは異なり、この時代のギリシア住宅は土壁と木造で建てられていた。とはいえけっして簡素なものではなく、ギリシアの風土や気候といった自然とよく適合した、環境共生住宅ともいえるべき快適な空間をそこにみることができると、オリントスの住宅群の図(図2)をみると、路地に面して五軒ずつ並ぶタウンハウス形式のものであってもかならず中庭をもち、その周囲に五〜六部屋を巧みに配置している。夏の強い陽射しをさえぎって涼しい陰をつくり、風を取り入れる工夫であり、また中庭は雨水を集める形式ともなっている。

プラトンの私邸を復元するにあたり参考としたオリントスのヴィラ(郊外住宅・別邸、図3)においても、ほぼ共通の建築プランがみられる。中庭を囲み、オエクスと呼ばれる居間・食堂、貯蔵室、寝室、台所などが配置されている。

なかでも特徴的なのは、アンドロンと呼ばれる寝台を備えた部屋である。住宅のなかでも特別の部屋とされ、床にはモザイクタイルによる装飾がみられる例も多い。アンドロンは客人を招き、シンポジオン(饗宴・共同食事)をするための部屋とされている。プラトンの著作『饗宴』では、酒席での活発な議論が展開されるが、それと同様のことがアカデメイアの私邸においても教師や学生たち、あるいは客たちとのあいだで繰り広げられたものと想像される。プラトンはその著『法律』のなかでも、「酒をかこんでともに閑談の時を過ごすことも、それが正しく行なわれるなら、教育に寄与するところじつに大き

い」(岩波文庫版より)と書いている。古代ギリシアにおいては、シンポジオンはまさにそういう役割をもっていた。

私邸の規模については、プラトンの経済力が富裕な商人層ほど大きなものではなく、また質素な生活を送ったといわれるプラトンのイメージなどを考慮し、中流程度の標準的な住宅と設定した。またこの時代の住宅には、一般に二階部分がある。女性の地位の低い古代ギリシアでは、生活域も男性とは区別され、二階は女性や使用者の部屋とされていた。二階との行き来には木製の梯子がかけられ、夜間には主人がその梯子をはずして奴隷などの使用者が逃げないようにしたともいわれている。

復元した私邸も一部を二階建てとしたが、プラトンは生涯独身であったと思われる。身近な女性としては母親と妹の存在が知られているが、同居していたかどうかは不明である。二階は身のまわりの世話をする使用者の居住用と考え、最小限の空間を設定した。あるいは宿泊用など、学校施設の一部として開放されていた可能性もある。

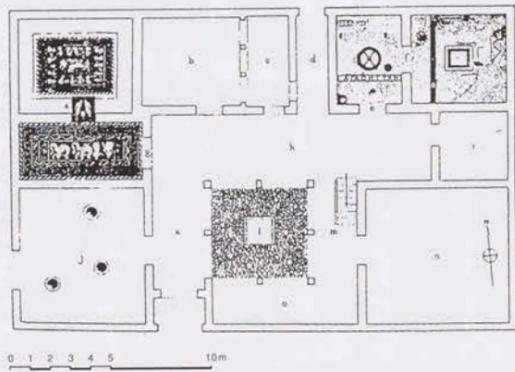


図3 オリントスの郊外住宅・別邸の平面図(参考資料)

●エペーベイオン(講堂)
Ephbeion

プラトンの学校の枢軸となるギムナシオンやストアは、市民が自由に利用できる公共施設でもある。厳密なカリキュラムに基づき学生たちの教育を日々おこなうには、これだけでは不十分だったのでないだろうか。かりにプラトンの私邸が研究者や学生に利用されていたとしても、やはり学校の運営面からみて限界がある。

そこで私たちは、学校固有の施設とはいえないまでも、より学校の機能に近い施設があったのではないかと推察した。検討をおこなった結果、想定した建物がエペーベイオンである。

ギムナシオンのなかにエクセドラという休憩・談論の部屋があることは前述したが、そのなかでもとくに広く、立派な部屋をエペーベイオンと呼ぶ。ここでは、そのエペーベイオンを階段教室的な構造をもつ独立した建物として想定した。

内部に階段状の立体的構造をもつ建物は、議論や問答などに適している。古代ギリシアではブーテウテリオン(評議場)や劇場に、その姿をみることができるとくにブーテウテリオンの内部空間は、すり鉢状になっていて中央にステージをもち、周囲には階段状の石段(座席)が設置されている。アテナイに代表される民主政治のための中心的舞台ともいえ、国政にかかわる重要な評議がおこなわれる建物である。とくにミトレスのブーテウテリオン(図4)は規模も大きく、よく知られている。

アカデメイアでは、ミトレスのブーテウテリオンの基本構成を守りつつ、学校の規模や時代性などを考慮し、平面で約10メートル×10メートル、内部は方形の三段の階段構造をもつ、小規模でシンプルなエペーベイオンとした。ちょうどひとりの教師に対し、十数人の学生が討議や問答するのに適したスケールである。

建物の内部は、装飾の要となる四本のイオニア式円柱が立ち、周囲の壁とともに木造の小屋組みを支える構造とした。イオニア式の円柱には、柱頭に左右一対の渦巻状の彫刻が施されている。また、左右の渦巻状彫刻のあいだには、舌状紋と呼ばれる舌の形の装飾がみられるが、その形状にはさまざまある。円柱の下部には、ドーリス式とは異なり、トロスと呼ばれるくり型の台座とベース(柱礎)がある。柱全体としてみると、ドーリス式よりも格段に装飾

的でエレガントであり、建物に瀟洒な印象を与えてくれる。プラトンが、あるいはアリストテレスが、次代をになう若者たちに講義をおこなう場所としては、エペーベイオンのような建物がふさわしいのではないだろうか。

なお、アカデメイアにはプラトンの著作や、教育に必要な図書・資料を保管し、かつ閲覧するための施設(図書館)が存在した可能性が高い。当初から独立した建物ではなかったにせよ、このエペーベイオンの付属施設、ないしは私邸内の図書室として、その役割を果たしたものと推察した。

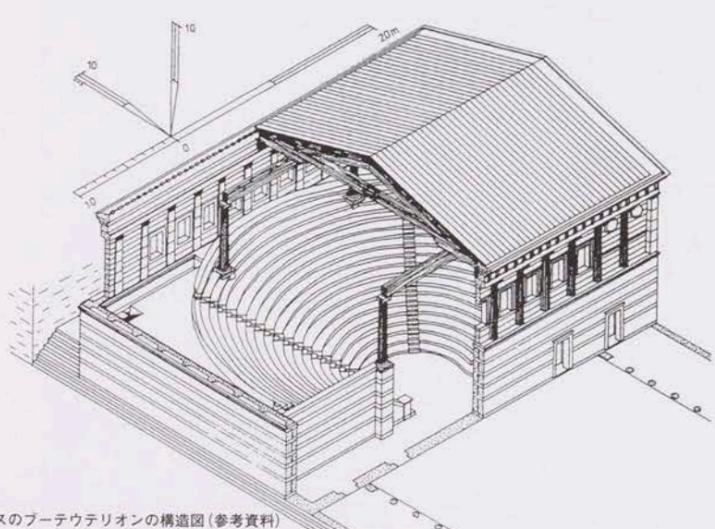
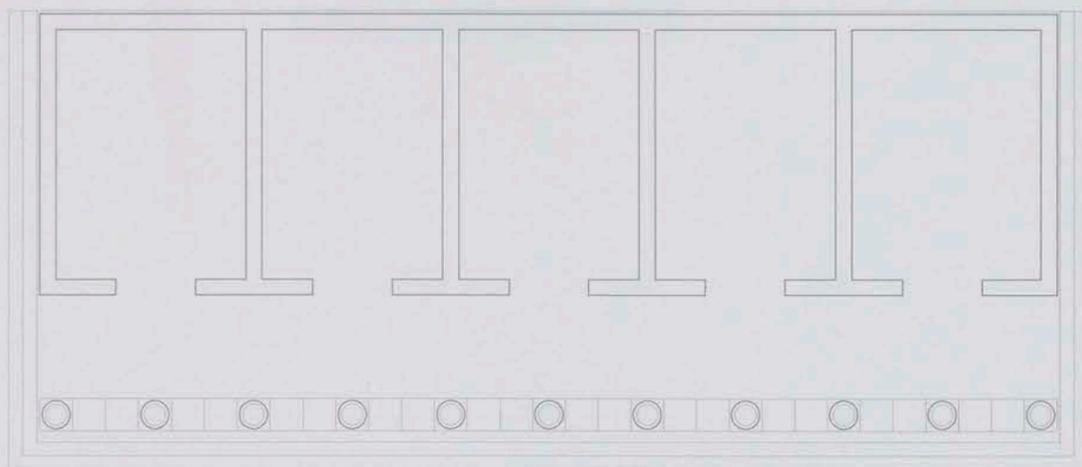
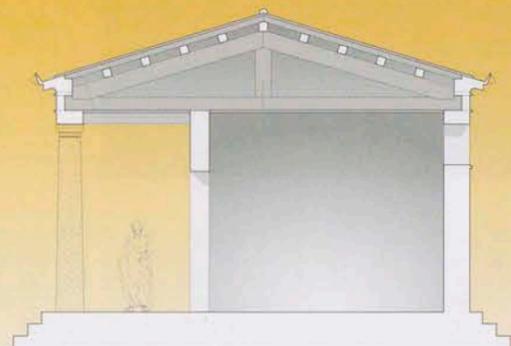


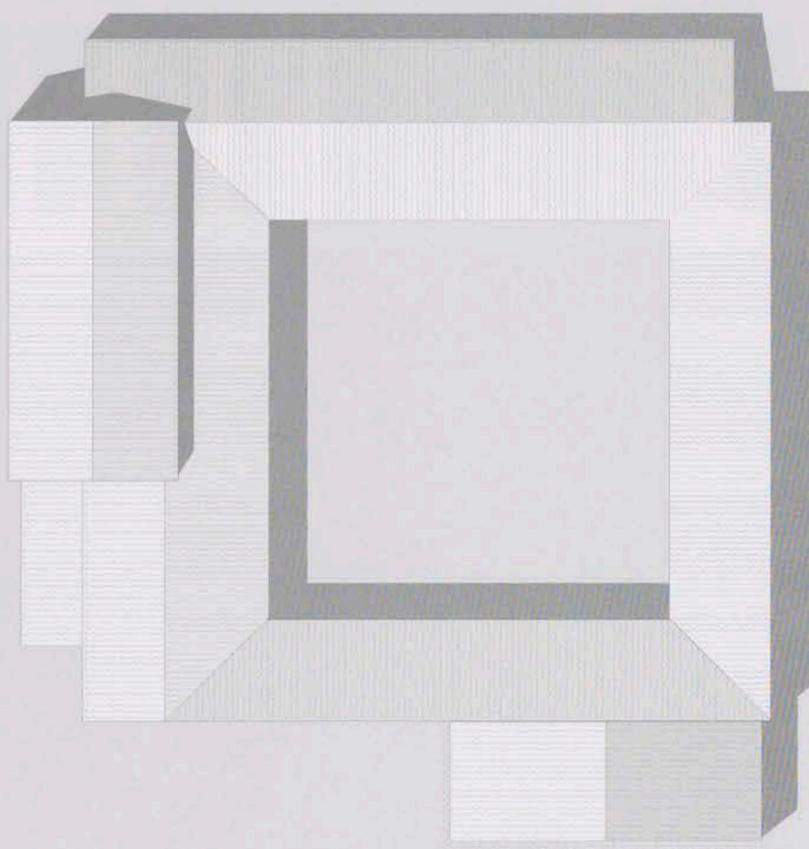
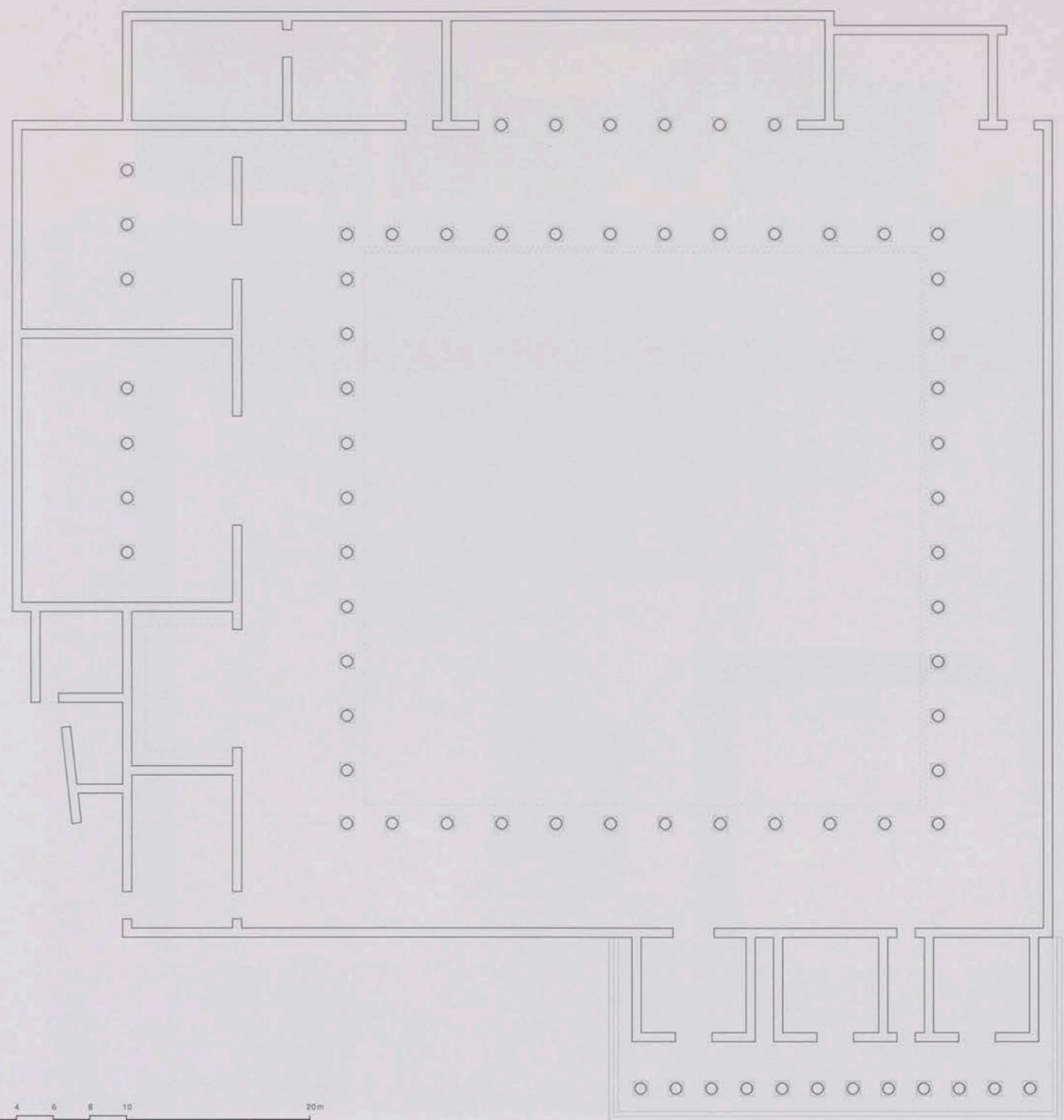
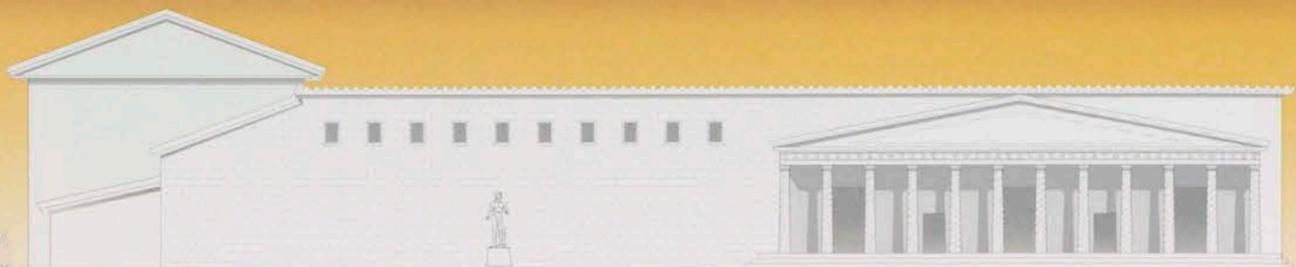
図4 ミトレスのブーテウテリオンの構造図(参考資料)



アテナイ市Platonosにある、アカデメイアの学園跡(現在は公園)

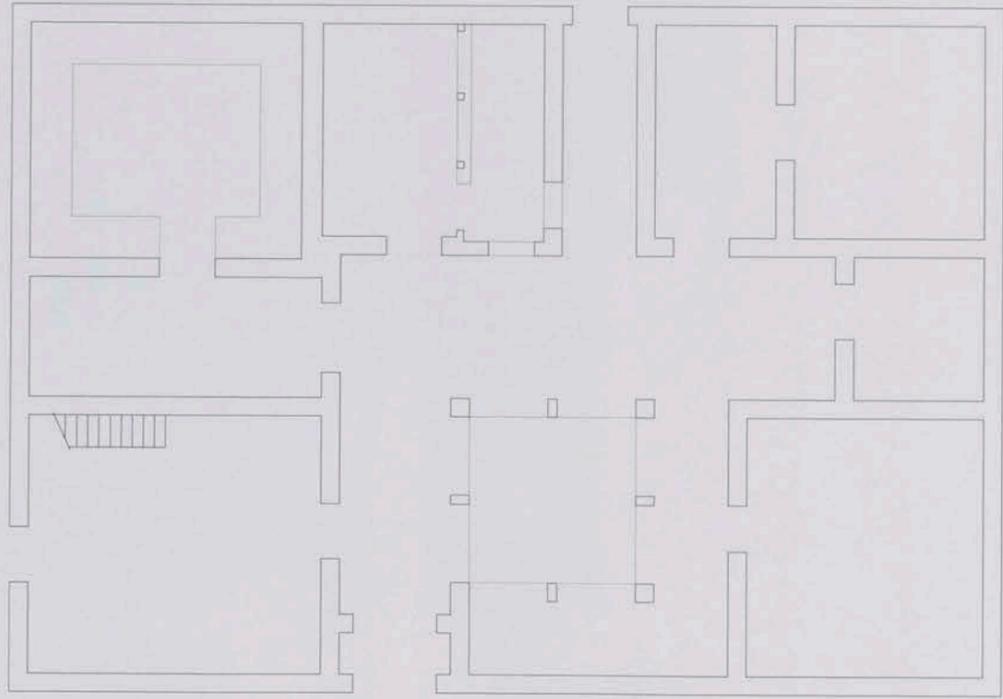
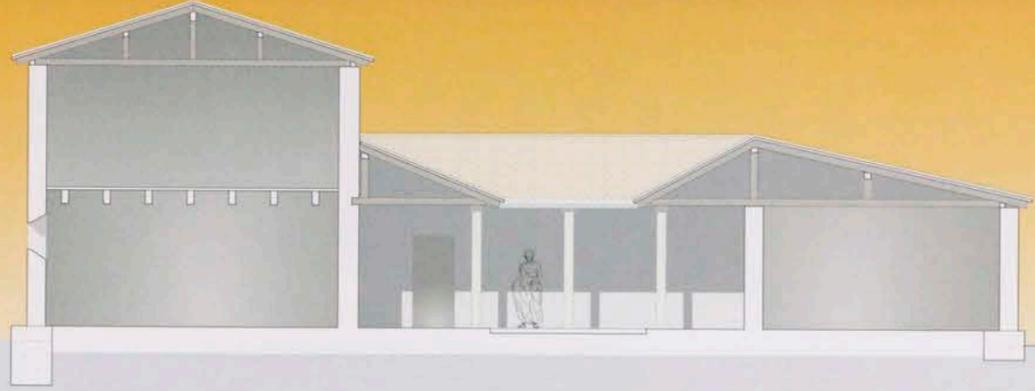


0 1 2 3 4 5 10m

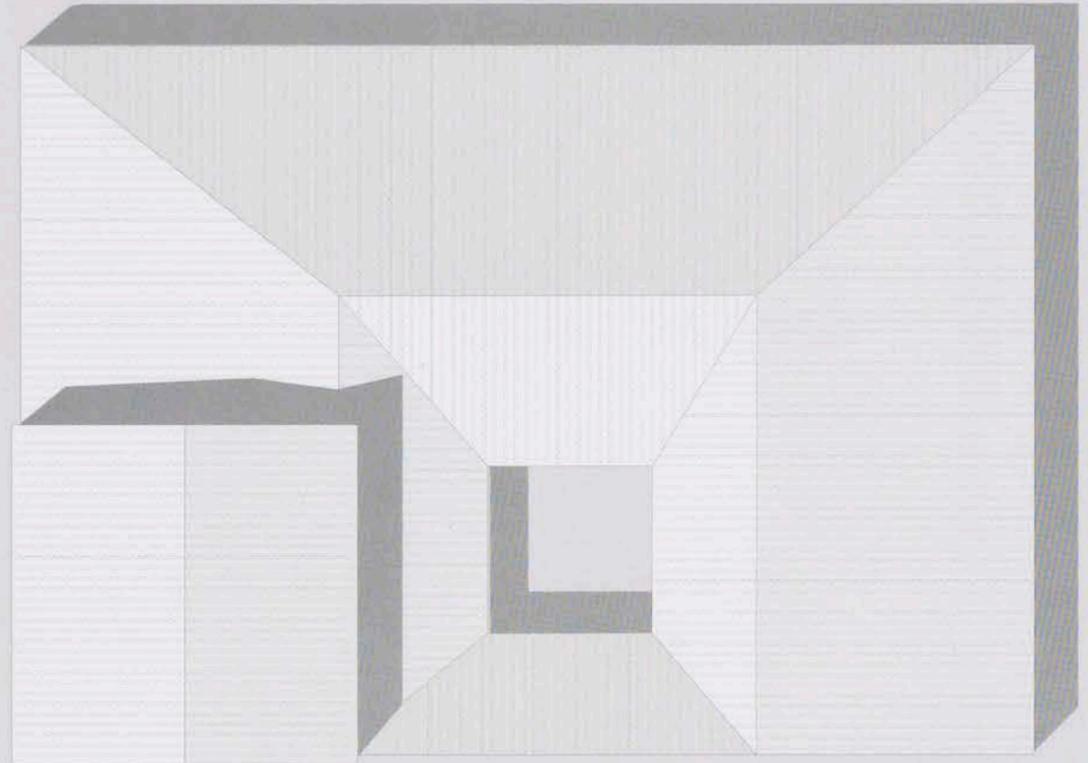


Gymnasium
ギムナシオン(体育場)

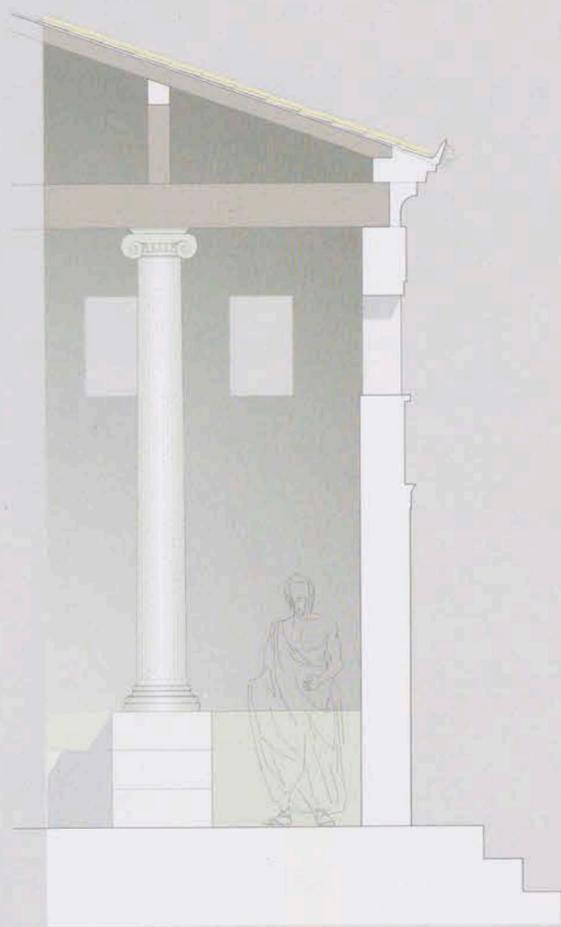
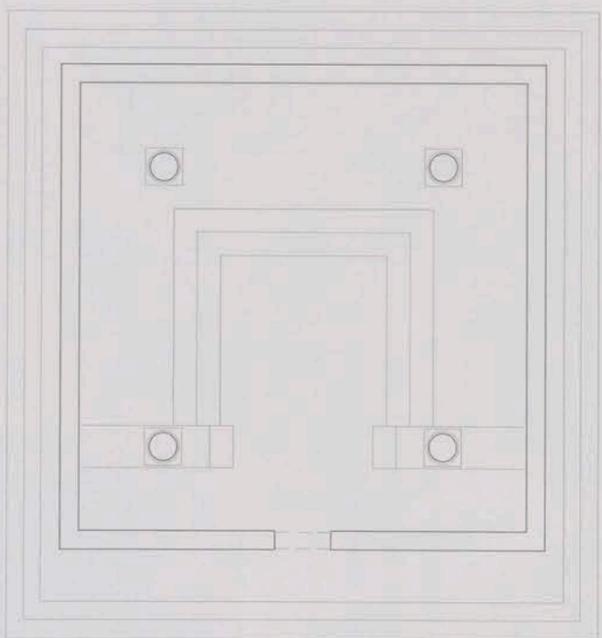
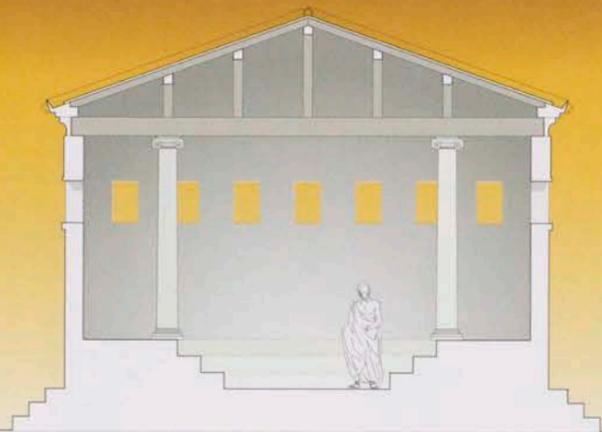
Plato's House
プラトン私邸



0 1 2 3 4 5 10m



Ephbeion
エペーベイオン(講堂)



0 1 2 3 4 5 10m

③アカデメイアの全体配置

最後に、アカデメイアの建物の配置についても検討をおこなった。本来ならば、最初におこなうべき作業であるが、約二四〇〇年前の実像を知るための資料はきわめて乏しい。プラトンの私邸の位置ひとつにしても、ギムナシオンの近くとも、神苑の北にあるコロノス・ヒッピオス(馬の丘)とのあいだともいわれ、創設期の姿については想像をたくましくするほかはない。

古代ギリシアの都市計画では、軸線を基準とした整然とした建物の配置関係が知られているが、それはヘレニズム時代以降のことで、プラトンの時代にはそうした手法はまだ採用されていない。むしろ自然地形などを利用した、かなりおおまかなものであったようである。そこで今回は、トラプロスの地図(P6図)をもとに、アカデメイアの自然地形や建

物ごとの方位性、さらには建物と建物との関係などを考慮しつつ、建築的にみてもっとも合理的と思える配置を想定してみた。

アカデメイアには今回想定復元したほかに、ムウサの社殿(ムウセイオン)があったことが知られている。またプロメテウス、アテナ、ヘラクレスなど神々の像が、建物のそばや森の小道沿いに建てられていた。緑豊かな神苑の森で、古代の神々とともに耳を傾けるプラトンの講義とは、どういうものであったろうか。フィロソフィー(哲学)の語源ともなった、フィロソフィア(知を愛する)の精神が、そこには横溢していたであろう。二一世紀を生きた私たちに、その鼓動が聞こえてくるような気がする。

プラトン亡き後、森の一角に墓碑が建てられた。その碑銘の冒頭には、こう記されていたという：「よき思慮と正しき性人にすぐれ、神にも似たるアリストクレス(プラトン)この地に眠る」

◎作業を終えて

プラトンの有名なことに比べ、その思索の場となつた学校アカデメイアについてはあまりにも知られていない。今回、復元作業に着手したとき、私たちプロジェクトチームが最初に感じた印象は、そういうものであった。しかし、プラトンが四〇歳頃から亡くなる八〇歳までの大半をそこで過ごし、いまでも残る数多くの著作を記したこと、またアリストテレスやエウドクソス、スベウシッポスといった古代ギリシアの著名な哲学者や碩学たちがそこで学び、あるいは教えたことは、まきれもない歴史的事実である。

私たちは、日本の近代思想にも多大な影響を与えたプラトンの学校を、より身近な、生きた姿として再現してみたいと考えた。今回の復元作業では、歴史や思想的側面においては廣川洋一著「プラトンの学園アカデメイア」(講談社)をはじめ、田中美知太郎著「プラトン」、ジョン・バーネット著「プラトン哲学」(共に岩波書店)などの著作を参考とした。建築面においては東京大学の青柳正規教授からのご指導と資料の提供をいただき、同時代のギリシア建築を参照しながらの想定復元をおこなった。具体的な資料が乏しいだけに、かえって想像力を刺激する部分が多かったが、復元にあたっては建築的にみて合理的と思われる視点をとくに重視した。古代ギリシア建築が対象だけにまだまだ興味はつきないが、プラトンの学校の建築環境を考察し、日常の姿を具現化するという意図は、かなり達成できたと考えている。

政治や社会の昏迷が指摘されている現代、今回の復元作業が、哲学の役割と場を再認識する一契機ともなれば幸いである。最後になったが復元作業に多大なご協力をいただいた東京大学の青柳正規教授に改めてお礼申し上げたい。

全体配置
direction

